

私の人生

北海道 大鐘 次朗

私は、昭和十九（一九四四）年九月二十日、旭川第七部隊に入隊、満州要員で九月二十七日旭川を出発、十月八日佳木斯七三三部隊に到着して初年兵教育を受けました。佳木斯七三三部隊は独立混成七八旅団工兵で、二十年四月に動員令により、幹部候補生を残して殆どの兵隊は南方の戦地へと行ったのでした。その後、満州の各社の社長、部長さん達の年配の初年兵が入ってきて、私達幹部候補生が班長や衛兵等までやりながら幹部候補の勉強をしていたのです。甲幹になったのは、浜田さん、柳田さん、水野さんと私の四人でした。甲幹、乙幹合わせて十三人おり、九人が乙幹でした。

その十三人で、見習士官と写した写真を今も私持っております。この写真だけはシベリアでも身から離さず持って帰りました。チチハルに行つて

からの原隊のことはわかりません。

シベリアに入ったときの大隊長、シベリア入りの分所とかは今も全く思い出せないのです。ただ十二月四日にシベリア行きのためハバロフスクからトラックでコムソモリスクへ入った丸太小屋の捕虜収容所に入り、寒さに悩まされ、寒くて夜眠れなかったことを覚えています。それにシラミが体中ウヨウヨしていて取っても取ってもだめでした。ソ連の肌着と交換して消毒してもらって二カ月ぐらいでシラミもようやく治まりました。ソ連の女医さんに毎月陰毛をカミソリで剃られました。食事は毎日コウリヤンでした。よくもあんなものを食べて生きていたものだ、思い出して一生忘れることのできないことです。

収容所ではソ連兵は私達によくしてくれたと思います。近くにドイツ兵がおりましたが、独ソ戦のこともあってドイツ人の捕虜には強制して作業をさせていましたね。

作業は、私は帰るまで枕木製材の丸太運びでし

た。独ソ戦のために今まで敷設していた鉄道のレールを撤収した跡があり、私達は再度敷設するための枕木作りでした。

実は私、浜田さんとどこでどうなつて離れ離れになつたのか、いくら考えても思い出せないのです。毎日の中で、病気で死んで行く戦友を見て何とも言われなき気持ちで過ごしてきました。

私の収容所から昭和二十二年八月初めに、第一回の日本への帰還の名前が夕方の点呼のとき十人ほど発表され、みんな本当に帰れるのかなあーと思つていました。それから間もなく第二回目の発表に私の名前があつたときの喜びは何と涙を止めることができませんでした。ナホトカに一週間ぐらいいて、日本の船に乗って日本人の看護婦さんの顔を見て、これで本当なんだなあと思ひました。

私は、昭和十九年に北海道炭砒汽船株式会社に入社し、空知鉱業所神威砒に配属されました。同年九月二十日旭川第七部隊に入隊、満州第七三三部隊へ。私は炭坑技術職員でしたので、帰還後も

技術屋として勤務し、三十八年の合理化で退職し札幌へ出ました。その後、デパートに入社して五十六年定年退職、それから年金生活でした。